

古英語強変化動詞 (Ⅲ)

森 基 雄
Motoo, MORI

前回(Ⅱ)の古英語強変化動詞の現在時制の接辞に続き今回(Ⅲ)では過去時制の接辞についても歴史的に論じ、そして1~7類のうち1類における現在時制と過去時制の双方に関しさらに具体的に、アプラウトの古英語における反映も含め、屈折に伴うさまざまな音変化に着目しながら論じていきたい。

まず古英語の直説法過去における接辞は単数1、3人称が接辞なし、2人称が-e、複数が-onであった。その実例として2類**bēodan** ‘to command’、3類**bindan** ‘to bind’、4類**beran** ‘to bear’を挙げておく。

単数1、3人称 **bēad** (OS **bōd**, OHG **bōt**, ON, Go **baup**)

2人称 **bude** (OS **budi**, OHG **buti**, ON **bauzt**, Go **baust**)

複数 (3人称) **budon** (OS **budun**, OHG **butun**, ON **buþu**, Go **budun**)

単数1、3人称 **band** (OS **band**, OHG **bant**, ON **batt**, Go **band**)

2人称 **bunde** (OS **bundi**, OHG **bunti**, ON **bazt**, Go **banst**)

複数 (3人称) **bundon** (OS **bundun**, OHG **buntun**, ON **bundu**, Go **bundun**)

単数1、3人称 **bær** (OS, OHG, ON, Go **bar**)

2人称 **bære** (OS, OHG **bāri**, ON, Go **bart**)

複数 (3人称) **bæron** (OS, OHG **bārun**, Go **bērun**)

単数1、3人称のゼロ接辞は各々、完了時制の接辞IE -a (Gk **léloipa** ‘I have left’, **oīda** ‘I know’)、-e (Gk **léloipe** ‘he has left’, **oīde** ‘he knows’) に由来し、これはゲルマン語派ではOE **bēad**、**band**、**bær**のように完全に消失している。

単数2人称の接辞OE -e (OS, OHG -i) はアオリスト(不特定過去)の接辞IE -es (Gk **élipēs** ‘you left’, **éphuges** ‘du flohest’) に由来し、さらにこれは語幹形成母音eプラス第二次人称語尾-sから成り、IE -es>Gmc -iz>WGmc -i>OE -eという過程を経てきたと考えられる。OE **bēodan**の場合、この接辞は本来ならば***byde** (OS **budi**, OHG **buti**)のようにi-ウムラウトを起こしていたはずである。また重語根の後位置ではこの接辞はGmc ***gastiz**>WGmc ***gasti**>OE **giest**(OS, OHG **gast**) ‘guest’の場合とまったく同様、完全に消失していたはずであり、従って本来ならば**bindan**の場合、OE ***bynd** (OS ***bund**, OHG ***bunt**)、さらに**beran**の場合、OE ***bær** (OS, OHG ***bār**)となっていたはずである。しかし実際の形はOE **bude**、**bunde** (OS **bundi**, OHG **bunti**)、**bære** (OS, OHG **bāri**)であり、本来起こるはずの古英語のu>yのi-ウムラウトも見られず、また重語根の後位置にもかかわらず接辞Gmc -izがOE -e (OS, OHG -i)として残っているという予想外の結果となっているのである。Bammesberger (1982: 417) は、***budi**>***byde**が**bude**に取って代られてi-ウムラウトが排除されているのは直説法過去のうち単数2人称だけがi-ウムラウトを持つ形であったためにそれが同じゼロ階梯でi-ウムラウトとは最初から無関係の複数人称**budon**に従ったことによるものであり、また**bunde**のようにi-ウムラウトがないばかりか、重語根の後位置にもかかわらずeがあるのは**bude**のような軽語根形に同化

したためであるとしている。

他方、古ノルド語とゴート語では西ゲルマン語とは異なり、単数2人称の語根母音はo-階梯であり、また接辞は-tであり(ON, Go bart)、これは単数1、3人称の接辞と同じく完了の接辞であるIE -tha (Gk oīstha, Skt vettha ‘you know’ < IE *woid-tha) を反映するものである。しかしこの接辞は古英語でもscealt (OS, OHG scalt, Go skalt) ‘shall’、þearft (OS tharft, OHG darft, ON, Go þarft) ‘need’ のような過去現在動詞の現在単数2人称に見られる。この接辞はゲルマン語派ではs、f、hの後位置で-t、それ以外の環境では-þとして現れるのが規則的な発達のはずである。すなわち本来予想される形はbartではなく*barþ、そしてOE scealtではなく*scealþである。従ってこの接辞-tは例えば5類Go lisan ‘lesen’、6類Go hafjan ‘heben’、Go slahan ‘to slay’ の過去単数2人称last、höft、slöht、過去現在動詞OE þearft、ON、Go þarftのようなs、f、hの後位置での発達形-tが一般化された結果と考えられる。ただしゴート語でもアオリストの接辞IE -esの反映は過去現在動詞の命令法単数ōgs ‘fear’ の-sに残る。

複数人称の接辞-on (OE budon, bundon, bæron) は全人称に共通であり、元来これは3人称の接辞であったが、それが全人称に一般化されたものである。これはGk phérō ‘I bear’ の未完了過去、アオリストépheron < IE *ebherontに見られるのと同じ複数3人称の第二次人称語尾IE -ntに由来し、ゲルマン語派ではこれが語根に直接後続し、-ntのnが音節主音的異音となった結果-nt > -unとなり (EOE, OS, OHG -un, ON -u, Go -un)、さらにOE -onとなったのである。

次に古英語の假定法過去の接辞は単数の全人称が-e、複数の全人称が-enであった。

- | | |
|----|--|
| 単数 | 1人称 bude (OS budi, OHG buti) |
| | 2人称 bude (OS budis, OHG butīs, ON byþir, Go budeis) |
| | 3人称 bude (OS budi, OHG buti, ON byþi, Go budi) |
| 複数 | (3人称) buden (OS budin, OHG butīn, OSwed byþi) |
| | |
| 単数 | 1人称 bunde (OS bundi, OHG bunti) |
| | 2人称 bunde (OS bundis, OHG buntīs, ON byndir, Go bundeis) |
| | 3人称 bunde (OS bundi, OHG bunti, ON byndi, Go bundi) |
| 複数 | (3人称) bunden (OS bundin, OHG buntīn, ON byndi) |
| | |
| 単数 | 1人称 bære (OS, OHG bāri) |
| | 2人称 bære (OS bāris, OHG bārīs, ON bærir, Go bēreis) |
| | 3人称 bære (OS, OHG bāri, ON bæri, Go bēri) |
| 複数 | (3人称) bæren (OS bārin, OHG bārīn, ON bæri) |

假定法過去の接辞はIE -jē-、-ī- < -jeX₁-、-iX₁- プラス第二次人称語尾に由来し、語根と語尾の間に語幹形成母音 (thematic vowel) IE e、oを伴わずに語根に直接付加されてathematicな語幹を形成した。すなわちこれはathematicな希求法であった。もともと単数では正常階梯-jē-が、複数ではゼロ階梯-ī-が付加されていたことはathematicな動詞 ‘to be’ の希求法OLat siem、siēs、siet、Skt syām、syās、syāt (各々単数1、2、3人称)、Lat sīmus (複数1人称)、Gk eīēn < *esjēm (単数1人称)、eīmen < *esīmen (複数1人称) から明らかである。他方、前回(II) で扱った假定法現在、その接辞の母音IE -oi-が語幹形成母音-o-プラス上記-jē-、-ī-のうち-ī-に由来するとされ、従ってこれはthematicな希求法に由来することになる。

ゲルマン語派の假定法過去では-jē-、-ī-のうち-ī-のみが残り、一般化された。このことはゲルマン語派の ‘to be’ の假定法現在単数1、2、3人称OE sī、OS、OHG sī、sīs、sī、複数(3人称) OE、OS、OHG sīn、そして上記の3つの動詞の変化表の古英語以外の変化形からもわかる。すなわち単数の接辞はGmc -īn (1人称)、-īz (2人称)、-ī (3人称) に由来し、これらは各々IE -ī-プラス第二次

人称語尾IE -m、-s、-tを反映し、古英語ではこれらがすべて-e (bude, bunde, bære) となったとされる。そして複数人称のOE -en (buden, bunden, bæren) は直説法現在、過去、そして仮定法現在の場合と同様、3人称の形が全人称に一般化された結果であり、IE -i-プラス第二次人称語尾IE -ntを反映するとされる。しかし古英語では当然予想されるi-ウムラウトが見られない。

ゲルマン語派の現在時制ではathematicな仮定法はまれであり、古英語においてこれが現れるのは‘to be’、‘to come’、そして過去現在動詞である。‘to be’の場合、前記の古サクソン語、古高地ドイツ語と同様、単数の場合sīが現れるが、これと並んでthematicな仮定法の影響を受けたsīeという形も見られる。cuman ‘to come’の場合、i-ウムラウトを示すcyme < *kumī (Skt gamyā-) という形が現れる。そしてathematicである完了組織を現在組織として継承する過去現在動詞の仮定法はdyge (OS dugi)、þyrfe (OHG durfi)、dyrre (OHG giturri)、scyle (OS, OHG sculi)、myne (OS muni) であり(直説法現在単数は各々dēag (Go daug) ‘avail’, þearf (Go þarf) ‘need’, dearr (Go gadars) ‘dare’, sceal (Go skal) ‘shall, owe’, man ‘think’)、いずれも予想どおりi-ウムラウトを示す。

しかし古英語の強変化動詞の仮定法には前記のcymeを除き、なぜかi-ウムラウトがまったく現れないことから、Bammesberger (1982) は接辞-e、-enの母音eが(IE ī >) Gmc īを直接継承したものであるとする従来の見解を疑問視している。仮定法過去の接辞の母音eの初期の段階として本来他のゲルマン語と同様、初期の文献にiが現れて当然であるが、そのような現れ方は実際にはまったく見られず、また弱変化動詞の場合ではあるが、仮定法現在に見られる(-ai >) -æ(のちに-e)が現れているケースが確認できることから、Bammesberger (1982: 415-6) は強変化動詞においてもまた仮定法過去の-iがすでに仮定法現在の-æに取って代られていたのであり、またi-ウムラウトを持つcyme、scyleのような仮定法現在形が見られるのは、-iが-æに取って代られたのが過去時制に限定されていたためであるとしている。

それではなぜ仮定法過去の-iが仮定法現在の-æに取って代られたのであろうか。Bammesberger (416-8) は、古英語では単数2人称の場合、直説法過去の例えば*budizと仮定法過去*budizが一致して*budiとなっていた段階があったと考えられるが、古英語では音韻的に引き起こされた直説法と仮定法とのこのような融合には抵抗する傾向があったため、この失われた区別は直説法過去と融合した仮定法過去*budiの接辞-iがはっきりとした仮定法標識-æに取って代られることにより復活し、この-æがさらに仮定法過去全体に及んだとしている。他方、古サクソン語と古高地ドイツ語では直説法budi、butiに対し、仮定法では-s、-s(t)の付いたbudis、butīs(t)とすることにより、直説法と区別している。これは前回(Ⅱ)で論じた直説法現在、弱変化動詞の直説法過去、仮定法現在の場合と同様IE s > Gmc z とþu ‘thou’との結合に起因すると思われる-s、-s(t)を反映するものと考えられるが、古英語ではなぜか仮定法の現在も過去も、強変化動詞の直説法過去もこのような音結合には由来しない、完全な末尾のIE -s > Gmc -zが西ゲルマン語では消失するという本来の発達を直接反映している。

しかし古英語ではこうして復活した過去単数2人称の直説法と仮定法の区別が保たれていたのは、-iと-æがまだ-eとして融合していなかった古英語の初期という一時期に限られていたと考えられるのであり、結局、直説法も仮定法もi-ウムラウトのないbudeとして融合してしまったのである。

これに対し、仮定法現在の単数2人称cyme < *kumiz、scyle < *skulizの直説法現在はcymes、scealt、そして‘to be’の仮定法現在の単数2人称sīの直説法現在はeart、bistであり、すなわちこれらの動詞では直説法と仮定法の形態上の融合はなかったため、仮定法はその本来の姿を存続させることができたものと考えられるのである。

次にOE bēodan、bindan、beranの過去分詞は各々boden (OS gibodan, OHG gibotan, ON boþinn, Go budans)、bunden (OS gibundan, OHG gibuntan, ON bundinn, Go bundans)、boren (OS, OHG giboran, ON borinn, Go baurans)であり、接辞-enは動詞的形容詞IE -en-、-on- (もちろん両者はアプラウトの関係にある)に由来し、OE -enは主として後者からの発達であり、このことを裏付ける初期の形として-æn (< Gmc -an-)が見られる。他の語派で直接これに対応するものにSkt -ānás (< IE -onós)がある。そして前記のこの2、4類の過去分詞boden、borenの語根母音は元来は

ゼロ階梯を反映するGmc uであったのであり、それが次音節の母音の影響によるa-ウムラウトによりoとなったのである。3類bundenの場合、uに鼻音プラス子音が後続していたためa-ウムラウトは阻止された。またIE -en-からの発達であるEOE -inとそののちの反映-enを持つ形がi-ウムラウトという証拠を伴って例証される。例えばcuman ‘to come’、slēan (OS, OHG, Go slahan) ‘to slay’ の通常の過去分詞cumen、slægen、slagenに対しi-ウムラウトを伴う-cymen、-sleginum、-slegenという形も見られるのである。なお不定詞cuman (OS kuman, OHG cuman, coman, ON koma, kuma)、過去分詞cumen (OS kuman, OHG quoman, ON kominn, kuminn, Go qumans) の語根母音がboden、borenとは異なりa-ウムラウトによるoではなくもとのuのままであり、また他のゲルマン語においてもしばしばそうであるのは、後続の単一の鼻音mの影響によるものである。

また例えば3類weorpan (OS werpan, OHG werfan, ON verpa) ‘to throw’ の過去分詞は通常はゼロ階梯の語根母音uがa-ウムラウトを受けた結果音oを持つworpen (OS worpan, OHG giworfan, ON orpinn) < Gmc *wurpanazであるが、このほかにこのoがさらにi-ウムラウトを受けた結果音を示すwoerpenという形も見られるのである。このように語根母音がi-ウムラウトを示すということは接辞-enは通常のEOE -ænではなく-inに由来することになるのであり、本来であれば前記の-cymenと同様uのi-ウムラウトによるyを示すOE *wyrpen (< *wurpin < Gmc *wurpenaz) となっていたはずである。従ってこの場合Gmc *wurpanazがいったんEOE *worpænとなった後、接辞-ænがi-ウムラウトに先立ち-inに取って代られたために*wurpin > woerpenとなったものと考えられる。

過去分詞の接辞-en < EOE -æn < WGmc -an (< IE -onós) も不定詞の接辞-an (-onもある) < WGmc -an (< IE -onom) もともにWGmc -anという共通の通過点にさかのぼることができるにもかかわらず、なぜか前者は-en < EOE -æn、後者は-anという異なる発達を示している。Campbell (1959: 141, 303) は、不定詞の無強勢音節における-anは強勢音節におけると同様、WGmc aは後続の鼻音により鼻音化されるとæにはならないという結果を示しているが、ただしそれには強勢音節の場合にはない条件があり、WGmc aはそれが後続のnと同一音節に属する非屈折形においてはæにならないのであり、不定詞の-anはもっぱらそのような非屈折形に由来するのに対し、WGmc aはそれが後続のnとは同一音節には属さない、例えば-ænæsのように屈折形においてはæになったのであり、過去分詞の接辞-æn > -enはそのような屈折形におけるæがのちに非屈折形へ移された結果であるとしている。

接辞の史的発達に続き、次はアプラウトを中心に古英語の強変化動詞類全体の現在時制と過去時制の成り立ちについて、古英語固有の点も含め、さらに具体的に踏み込んでいきたい。なおアプラウトの実例については同根であれば必ずしも時制の変化によるものには限定しない。

1類: īC ~ āC ~ iC ~ iC (OE rīdan ‘to ride’ ~ rād ~ ridon ~ riden, OHG rītan ~ reit ~ ritum ~ giritan, ModHG reiten ~ ritt ~ ritten ~ geritten) < Gmc ī ~ ai ~ i ~ i < IE ei ~ oi ~ i ~ i (Gk léipō ‘I leave’ ~ léloipa [完了], loipós ‘remaining’ ~ élipon [アオリスト]; Gk peíthō ‘I persuade’ ~ pépoitha [完了] ~ épéithmen [過去完了1人称複数] ~ épithon [アオリスト])

		現在時制		
		直説法	假定法	命令法
単数	1人称	rīde	} rīde	rīd
	2人称	rītst		
	3人称	rītt		
複数		rīdap	rīden	rīdap
不定詞		rīdan		
分詞		rīdende		

直説法単数の2人称rītstのtstはdst (語根末子音dプラス接辞st) > tst、3人称rīttのttはdp (語根末子音dプラス接辞p) > tp > ttという音過程の結果である。

過去時制

	直説法	假定法
単数 1、3 人称	rād	} ride
2 人称	ride	
複数	ridon	riden
分詞	riden	

ゲルマン語派の直説法過去単数は接辞に関して言えば、古ノルド語、ゴート語ではすべて完了形に由来し、西ゲルマン語でも 1、3 人称は完了形に由来するが、2 人称だけはアオリストに由来する。また周知のとおり、語根母音についても同じことが言えるのであり、単数 1、3 人称 rād の語根母音 ā (<Gmc ai) は完了単数を表わす o-階梯 IE oi に由来し、まさに完了形 Gk léloipa、léloipe; pépoitha、pépoithe に相当する。単数 2 人称 ride の語根母音 i はもちろんゼロ階梯 IE i に由来し、またこの形がアオリストに由来するということは、接辞も語根母音もともにこれに対応するアオリスト単数 2 人称 Gk élipēs (1 人称 élipōn) という形からも確かめられる。

直説法複数の語根母音は ridon のように単数 2 人称と同じゼロ階梯ではあるが、これは o-階梯を持つ単数 1、3 人称の場合と同じく完了形に由来する。このことは例えば Gk peithō の完了形で単数 1 人称が pépoitha であるのに対し、過去完了複数 1 人称が epépithmen であり、Skt bhid- 'to split' の完了単数 1 人称が bibheda (<IE *bhoid-) であるのに対し、複数 1 人称が bibhidima であることから明らかであろう。またこの正常階梯とゼロ階梯という相違がもともとはアクセントの位置に起因することは、もとのアクセントの位置を最もよく保持するとされる Skt bibheda: bibhidimá, véda 'I know': vidmá 'we know' (Gk oída: ídmen) のような関係からも推定できる。アクセントを有していたこの複数 1 人称の Skt -ma は第二次人称語尾 IE -mé に由来すると考えられるのであり、これは古高地ドイツ語、古ノルド語、ゴート語では (-mé > -m) -um に発達したが、古英語、古サクソン語ではこの接辞は失われており、前述のように複数では全人称が 3 人称の (-nt >) Gmc -un > OE -on、OS -un に取って代られた。假定法過去、過去分詞の語根母音もまたゼロ階梯を反映する。そして過去分詞の接辞 -en < -æn は対応する Skt -ānās から判断すると、印欧祖語ではアクセントを有していたのであり、またこのことが過去分詞の語根母音は無強勢に由来するゼロ階梯を反映するという結果にもつながっているであろう。

1 類の例として挙げた rīdan の、時制と数と人称の変化以外でのアプラウトを表す古英語の同根語としては、Gmc *raidō > rād 'Weg, Ritt'; Gmc *ridōn > torida 'Schaukel'; Gmc *ridjōn > ridda 'Ritter' があるが、動詞の現在時制と同じ e-階梯の同根語は例証されない。

他方、現在時制でありながら語根母音がゼロ階梯であるアオリスト現在動詞と呼ばれる ripan、hriopan、riopa、reopan 'to reap' (後 3 者は次音節の a に起因する後舌ウムラウトにより i > io (> eo) となった結果である) がある。過去複数には 1 類本来の ripon のほか、4 / 5 類に移行した発達を示す ræpon もあり、Brunner (1960-2, II: 212) はこれは不定詞 reopan の語根母音が 4 / 5 類と混同された結果であるとしている。

縮約動詞 tēon 'to accuse' ~ tāh ~ tigon ~ tigen (OS aftīhan 'versagen', OHG zīhan ~ zēh ~ zigun ~ gizigan, ModHG zeihen, Go teihan ~ taih ~ taihun ~ taihans) も元来は同じ 1 類であり、不定詞 tēon (OLat deicō 'I say', Gk deiknūmi 'I show') は、IE *deik- > Gmc *tīhan- > (ī が後続の h の影響で割れ (breaking) を起こし) POE *tīohan > (母音間で h が消失し) *tīoan > (a の消失により) tīon > tēon という音過程の結果である。語根末子音 h は過去単数 tāh、命令法単数 *tīh > (割れ) tīoh > tēoh、直説法単数 2、3 人称 *tīhst、*tīhiþ > *tīohist、*tīohiþ > (i-ウムラウトと i の中略 (syncope) により) tīehst、tīehþ においてははっきりと残っている。

このような縮約動詞を含め、語根母音が正常階梯に由来する現在時制と直説法過去単数 1、3 人称の

語根末子音がゲルマン祖語の無声摩擦音を反映する動詞の場合、語根母音がゼロ階梯に由来する直説法過去の単数2人称と複数人称、仮定法過去、過去分詞の語根末子音がその対応するゲルマン祖語の有声摩擦音を反映するという子音交替が見られる。このような子音交替はゴート語を除くすべてのゲルマン語の強変化動詞類に見られる。古英語の1類に反映されているものとしては、グリムの法則、ヴェルネルの法則と呼ばれる子音推移に由来する(IE t, k, k^{*}>) Gmc [θ, x, xw] と [ð, ɣ, ɣw] がある。例えば語根末子音がGmc [θ, ð] を反映するものとしては、OE snīpan ‘to cut’~snāþ~snidon~sniden (OHG snīdan~sneid~snitun~gisnitan, ModHG scheiden~schnitt~schnitten~geschnitten, Go sneiþan~snaip~sniþans), OE līpan ‘to go’~lāþ~lidon~liden (OHG līdan~leid~litun~gilitan, ModHG leiden~litt~litten~gelitten, Go leiþan~laip~liþun~liþans) に見られる。

例として挙げた4主要形、すなわち①不定詞、②直説法過去単数1、3人称、③直説法過去複数、④過去分詞のうち、①、②はグリムの法則によるGmc [θ] を反映し、また古英語の場合、①のように母音間の [θ] は [ð] に有声化され、②のように末尾であればそのままであったのに対し、③、④はヴェルネルの法則によるGmc [ð] を反映し、これはさらに閉鎖音WGmc [d] となったのである。すなわちIE tはふつうGmc [θ] (>OE þ[θ, ð]) となるのに対し、場合によりGmc [ð] (>OE d) となるのは、印欧祖語においてアクセントが接辞などIE tの直前以外の位置にあったためである。これは例えば親族名を表わす名詞OE brōþor、OS brōthar、OHG bruoder、Go brōþar (Skt bhrāta) ‘brother’ とOE fæder、OS fader、OHG fater、Go fadar (Skt pitā) ‘father’ との間に見られる子音交替とまったく同一の現象である。すなわち前述のように、動詞においては正常階梯の語根は元来アクセントを持っていた語根に、そしてゼロ階梯の語根は元来アクセントのなかった語根に由来するのであり、またこのことが強変化動詞に見られる子音交替の本来の要因でもあったのである。

ただしOE scriþan ‘to go’~scrāþ~scredon~scriþen (OHG skrītan~skritun~giskritan, ModHG schreiten~schritt~schritten~geschritten)、OE miþan ‘to conceal’~māþ~miþon~miþen (OS mīthan~mēth~midun~gimidan, OHG mīdan~meid~mitun~gimitan, ModHG meiden~mied~mieden~gemieden)、OE wriþan ‘to twist’~wrāþ~wriþon~wriþenのように、ヴェルネルの法則を反映するdが排除され、þに取って代られている例もある。

語根末子音がIE kに対応するものに前記のOE tēon~tāh~tigon~tigen、そしてwrēon ‘to cover’~wrāh~wrigon~wrigen (OHG rīhan~rigun~rigan)、そしてIE k^{*}に対応するものにOE lēon ‘to lend’~lāh~ligen (OS līhan~lēh~liwun~liwan, OHG līhan~lēh~liwun~giliwan, ModHG leihen~lieh~liehen~geliehen, Go leihwan, Lat linqūō, Gk leípō)、OE sēon ‘to sift’~sāh~siwen (OHG sīhan~sēh~siwan, ModHG seihen)があり、いずれも縮約動詞と呼ばれるものである。

tēonの過去時制		
	直説法	仮定法
単数1、3人称	tāh	} tige
2人称	tige	
複数	tigon	tigen
分詞	tigen	

OE tāh、OHG zēh、Skt didéśa<IE *dóik- : OE tigon、OHG zigum、Skt didiśimá<IE *dik- という対応からも一層明らかなように、前記のIE tの反映とまったく同じ条件下で、IE k、k^{*}は無声摩擦音Gmc [x, xw]、有声摩擦音Gmc [ɣ, ɣw]となったのであり、前者はのちにどちらもh[x] となり、不定詞tēon、wrēon、lēon、sēon<*tīhan、*wrihan、*līhan、*sīhanのように母音間では消失した。Gmc [ɣ, ɣw]のうち[ɣw]はligenのように唇音要素が失われているケースとsiwenのように唇音要素のみとなっているケースがある。

1類を含めすべての強変化動詞類の過去時制においてなぜかゴート語だけが徹底してヴェルネルの法則による有声音を示さないのであり、これは一般にはゴート語は強変化動詞においてはヴェルネルの法

則に起因する子音交替を排除し無声音に均一化したためとされるが、Voyles (1988: 69-72) は、ゲルマン語派の特徴である語根へのアクセントの固定がゴート語では他のゲルマン語の場合とは異なり、ヴェルネル法則に先立って起こっていたためであるとしている。確かにゴート語の場合、強変化動詞以外のケースでも、Go *hausjan* (OE *hīeran*, OS *hōrian*, OHG *hören*, ON *heyra*) ‘to hear’; Go *nasjan* (OE, OS *nerian*, OHG *nerien*) ‘to save’; Go *wasjan* (OE, OS *werian*, OHG *werien*, ON *veria*) ‘to clothe’; Go *ufar* (EOE *ober*, OHG *ubar*) ‘over’ などのように均一化では説明し難いと思われる、ヴェルネルの法則の欠如を示す例があることも事実である。

ヴェルネルの法則はまた語根末子音が (IE *s>*) Gmc *s* に由来するものにも本来起こるものであり、現に 3、5 類では (Gmc *s>z>*) OE *r* が現れるが、なぜか 1 類では予想される OE *rīsan* ‘to rise’ ~ *rās* ~ **riron* ~ **riren* ではなくヴェルネルの法則の欠如した *rīsan* ~ *rās* ~ *rison* ~ *risen* (OHG *rīsan* ~ *reis* ~ *rirun* ~ *giriran*, ON *rīsa* ~ *reis* ~ *risu* ~ *risinn*, Go *reisan* ~ *rais* ~ *risun* ~ *risans*) となっている。もちろん Gmc *s* は OE *rīsan*、*rison*、*risen* では母音間であったため [z] に有声化され、*rās* では末尾であったため [s] のままであった。

OE *drīfan* ‘to drive’ ~ *drāf* ~ *drifon* ~ *drifen* (OS *drīban* ~ *drēf* ~ *dribun* ~ *gidriban*, OHG *trīban* ~ *treib* ~ *tribun* ~ *gitriban*, ModHG *treiben* ~ *trieb* ~ *trieben* ~ *getrieben*, Go *dreiban* ~ *dribun* ~ *dribans*) では、摩擦音である語根末の *f* は *drāf* では末尾であるため無声音 [f] であるが、他の 3 つの形では母音間であるため有声音 [v] である。この点では前記 OE *p*、*s* の場合と完全に一致する。ただし歴史的には *drīfan* の場合、語根末の *f* は Gmc [β] に由来するため、ヴェルネルの法則による子音交替、すなわち (IE *p>*) ① Gmc [f] (グリムの法則) > EOE [f, v] と ② Gmc [β] (ヴェルネルの法則) > EOE [b] との子音交替とは最初からまったく無関係であった。また仮にたとえこの子音交替が該当するケースであっても、OHG *ubar*、EOE *ober*、OE *ofer* ‘over’; OHG *salba*、EOE *salb*、OE *sealf* ‘ointment’; OHG *nevo*、OE *nefa* ‘nephew’ のような対応からも明らかのように、EOE [b] はのちに完全に *f* [f, v] と融合してしまったためにその本来の子音交替は消去されてしまうのが実状である。

他方、語根末子音が IE *gh>* Gmc [ɣ] > OE [ɣ] を反映する OE *stīgan* ‘to ascend’ ~ *stāg* ~ *stigon* ~ *stigen* (OS *stīgan* ~ *stēg* ~ *stigun*, OHG *stīgan* > *steig* ~ *stigun* ~ *gistigan*, ModHG *steigen* ~ *stieg* ~ *stiegen* ~ *gestiegen*, Go *steigan* ~ *staig* ~ *stigun*, Gk *steíkhō* ‘I go’, Skt *stigh-* ‘to stride’) では主要形②には *stāg* のほか *stāh* という形もしばしば見られ、これは語根末子音が末尾では [x] に無声化されていたことを示している。従ってヴェルネルの法則というはるかに古い音変化に起因する有声音や母音間で子音が消失した縮約動詞の場合は別として、*stīgan* の場合も共時的に見れば 4 主要形において、母音間では有声摩擦音、末尾では無声摩擦音という子音交替を示しているという点では、前記の *līpan* ~ *lāp*、*snīpan* ~ *snāp*、*scrīpan* ~ *scrāp* ~ *scripen*、そして *mīpan*、*wrīpan*、*rīsan*、*drīfan* の 4 主要形の場合とまったく同じである。ヴェルネルの法則と同様このことはもちろん 1 類以外の強変化動詞類にも言えることである。

英語の歴史において動詞の借入語はたいてい弱変化動詞として組み入れられているが、もし OE *scrīfan* ‘to prescribe’ ~ *scrāf* ~ *scrifon* ~ *scrifen* (OS *scrīban* ~ *scribun*, OHG *skrīban* ~ *skreib* ~ *skribun* ~ *giskriban*, ModHG *schreiben* ~ *schrieb* ~ *schrieben* ~ *geschrieben*, OSwed *skrīva*) が Lat *scribere* ‘to write’ の借入によるものであれば、これは借入語が強変化動詞として組み入れられた極めてまれな例と言えるであろう。そして *drīfan* と同様、この *scrīfan* の場合も他のゲルマン語との比較から、そして主要形③、④に EOE *scribun*、*faerscribaen* のように *f* の前段階 [β] を持つ形が見られることから、この動詞の 4 主要形の語根末子音は Gmc [β] を反映するものであり、また当然ながらこの初期の 2 つの主要形における *b* はヴェルネルの法則とは無関係であることになる。

1 類に元来属する縮約動詞 *tēon* ‘to accuse’、*wrēon* ‘to cover’ は現在時制において *tēon* ‘to draw’ (OS *tiohan*, OHG *ziohan*, ModHG *ziehen*, Go *tiuhan*)、*flēon* ‘to flee’ (OS, OHG *fliohan*, ModHG *fliehen*, Go *pliuhan*) のような 2 類の縮約動詞と形が同一となっていることから混同により本来の 1 類としての語形変化だけでなく *tēon* ~ *tēah* ~ *tugon* ~ *togen*、*wrēon* ~ *wrēah* ~ *wrugon* ~ *wrogen* という 2 類に完全に移行した語形変化も見られ、また *lēon* ‘to lend’ にも過去単数としては本

来のlāhのほか2類に移行したlēahという形も見られる。

参 考 文 献

- Bammesberger, A. 1982. "Der Optativ bei athematischen Verbalstämmen im Altenglischen." *Anglia* 100, 413-18.
- Braune, W. & E. A. Ebbinghaus. 1989¹⁵. *Abriß der althochdeutschen Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Brunner, K. 1960-2². *Die englische Sprache: ihre geschichtliche Entwicklung*. 2 vols. Tübingen: Niemeyer.
- Brunner, K. 1965³. *Altenglische Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Campbell, A. 1959. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Gallée, J. H. 1993⁸. *Altsächsische Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Holthausen, F. 1974⁹. *Altenglisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Winter.
- Krahe, H. & W. Meid. 1969⁷. *Germanische Sprachwissenschaft, I, II*. Berlin: de Gruyter.
- Krahe, H. & E. Seebold, 1967². *Historische Laut- und Formenlehre des Gotischen*. Heidelberg: Winter.
- 森 基雄. 2000. 「古英語強変化動詞 (I)」 『奈良産業大学紀要』 第16集、129-37.
- 森 基雄. 2001. 「古英語強変化動詞 (II)」 『奈良産業大学紀要』 第17集、123-32.
- Nedoma, R. 2001. *Kleine Grammatik des Altisländischen*. Heidelberg: Winter.
- Seebold, E. 1970. *Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben*. The Hague: Mouton.
- Streitberg, W. 1974⁴. *Urgermanische Grammatik*. Heidelberg: Winter.
- Voyles, J. B. 1988. "Early Germanic changes in unstressed word-final syllables: problems and ramifications." *Lingua* 76, 63-90.
- Wright, J. 1910. *Grammar of the Gothic language*. Oxford: Oxford University Press.
- Wright, J. & E. M. Wright. 1925³. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.